

＜陽だまりにて＞朝方の気温が 10℃を切るようになってきましたが陽だまりでは春から夏の花がまだ咲いています。天気の良い昼下がりに見かけたのはタンポポの花と光で輝く種そしてコマツヨイグサの



＜陽だまりのタンポポの種とコマツヨイグサ＞

黄色い花です。どちらもたくましい生命力を持った植物です。とりわけコマツヨイグサはあまりのタフさで要注外来植物(北米原産)に指定されているほどです。

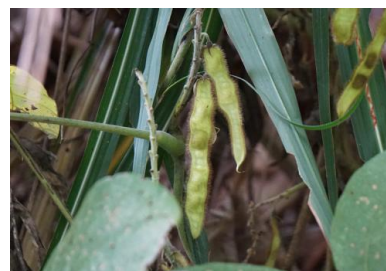
＜小鳥に託す＞キャンパスの所々にタブノキが植わっていて実を付けています。若いのは緑、熟したの黒紫の艶のある丸い実です。雑木林にはその仲間のシロダモがやはり丸い実を付けていますが色は真っ赤です。そういえば秋には赤いものと黒い実、とりわけ黒いのが多いと思いませんか。赤と黒は植物の繁栄戦略のひとつのようです。まず小鳥の目を惹き、次いで果実をまるごと食べられ遠くまで運ばれて糞として散らされるというものです。庭とか植木鉢から思いがけない植物が芽を出し、小鳥の贈り物にちょっぴり幸せな気分になったことはありませんか。



＜上：タブノキ、下：シロダモ＞

(タブノキ、シロダモ) タブノキは船材に使ったため朝鮮語の ton-bai (丸木舟) が変じて“タブ”となったとの説が有力です。そして葉裏が白い“ダモ(タブノキの古い名前)”ということで“シロダモ”の名があります。タブノキの樹皮は織物“黄八丈”の染料になり、シロダモの実の油脂は蠟燭の原料になります。

＜自力で＞林の脇ではクズやヤブマメが緑色の実を付けています。熟しても褐色で小鳥の目を惹きません。そのうち莢(さや)が乾きねじれて種を弾き飛ばすでしょう。ツリフネソウほど派手ではありませんが自力散布です。



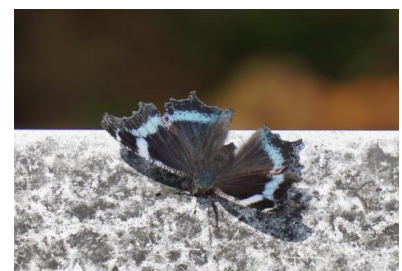
＜クズの果実＞



＜ヤブマメの果実＞

(ツリフネソウの自力散布) 果実は小さな青トウガラシのような格好をしていて(ピオトープの四季 No.25 参照)、指でちょっと触れるだけでも莢が勢いよく弾けて黒い種をかなり遠くまで飛ばします。

＜寒サニモマケズ＞タテハチョウの仲間は成虫で冬を越すほど丈夫なようです。ひと月前にはキタテハを紹介しましたが、新たにルリタテハを見かけました。気温の上昇した晴天の昼下がりに出てきたのでしょうか。ところで学名”K.c.no-japonicum”の”no-”は翅にあるルリ色の模様をカタカナの「ノ」にシーボルトが見立てたようです。(文と写真：松本正勝)



＜ルリタテハ＞